

## ■ 書 評



### ハームリダクションとは何か 一薬物問題に対する、あるひ とつの社会的選択一

松本俊彦, 古藤吾郎,  
上岡陽江 編著  
中外医学社

2017年8月 162頁  
本体価格 2,400円+税

厳罰主義に基づく薬物禁止政策は1960年代にはじまり、国際的に広がった。1971年に「薬物戦争」政策を開始し、薬物の取り締まりと厳罰化に対して莫大な予算を投じた米国が、その中心的な役割を果たしてきた。ところが、この50年間で薬物生産量・消費量は増加し、流通する違法薬物の種類は増え、危険性の高いものが増えるなど、薬物問題は深刻さを増している。厳しい規制によって薬物市場はアンダーグラウンド化し、薬物に関連する犯罪やそれによる受刑者、HIV感染症などの健康被害が増加していく中で、薬物禁止政策の費用対効果の低さに対する批判が高まってきた。2011年には、薬物政策国際委員会が、「国際的な薬物戦争は、世界中の人々と社会に対して破壊的な影響を与え、失敗した」と敗北宣言をした。そして、薬物依存症をもつ人に対して、刑務所に収容するのではなく、治療や福祉の支援を提供することが必要だと各国政府に提言したのである。

ハームリダクション (harm reduction) は、このような薬物問題をめぐる歴史の中で発展し、国際的に注目を集めている公衆衛生・公共政策上の概念である。「合法・違法にかかわらず、精神作用性のある物質について、必ずしもその使用量は減ることがなくとも、その使用により生じる健康・社会・経済上の悪影響を減少させることを主たる目的とする政策・プログラムとその実践」などと定義される。

ハームリダクションにおいては、人々が物質を使用し続けることについてはその是非を問われない (no judgement)。依存症や物質使用そのものではなく、あくまで物質使用に伴う害 (ハーム) を減らすことが目的とされる。薬物を使用している人々が実際には多く存在するという現実認識のもと、共感的プラグマティズム (compassionate pragmatism) とも呼べるス

タンスをとることによって、支援につながりにくい人が、安心して相談ができる場を産み出すことができる。

静脈注射による薬物使用がとまらない場合においても、注射器を共用することでHIVなどに感染することを防ぐために、清潔な注射針やシリンジなどを支給する「注射器交換プログラム」をはじめとして、薬物使用に伴う害 (ハーム) を少しでも減らすためのさまざまな実践が各国で展開され、その効果を示すエビデンスが積み上げられている。

「ダメ、ゼツタイ。」や、「覚醒剤やめますか？ それとも人間やめますか？」などの広報に象徴されるように、日本では規制と取り締まりの強化が重んじられてきた結果として、薬物依存症に対するスティグマが未だ根強く存在している。依存症の支援者の中にも、断薬や断酒を至上とする感覚をもつ人も少なくない。

抵抗を覚える人も多いと思われる現状の中、本書は薬物問題に対する1つの社会的選択の可能性としてのハームリダクションを、各国の取り組みを交えて紹介している。系統立てられた教科書のような形ではなく、研究者、支援者、当事者、刑務所の職員など、薬物をめぐるさまざまな立場の著者らが、まるで「言いつばなし、聞きつばなし」のミーティングのようにそれぞれ語っていく。受刑により人のつながりや居場所を失い、孤独の中で薬物を再使用し、暮らしや健康を損なっていく人に対して、「処罰ではなく、支援。(Support. Don't Punish.)」という通感した思いを持ちながら、それぞれの現場における実践の中での葛藤を抱えた著者らの真剣な語りの積み重ねの上に、ハームリダクションという概念が像を結んでいく。そこには、物質使用を責め立てることによって深いトラウマを抱えた人をさらに傷つけ、抑圧したり排除したりするという負の無限ループを、ハームリダクション的なアプローチによって抜け出すことができるという、支援の実感に基づいた希望が確かに存在している。

「使ってしまった」と、世界中で一箇所だけでも素直に口にできる場所があったならば、そこから回復へとつながる可能性がひらかれる。聴く耳を持たなければ、本当に困っている人が目の前に現れ続けることは決してない。

「精神科医療という名のもとに、処罰が行われていないか？」ハームリダクションから学び、私たちの日常の実践を改めて見つめなおす必要があるようだ。

(熊倉陽介)